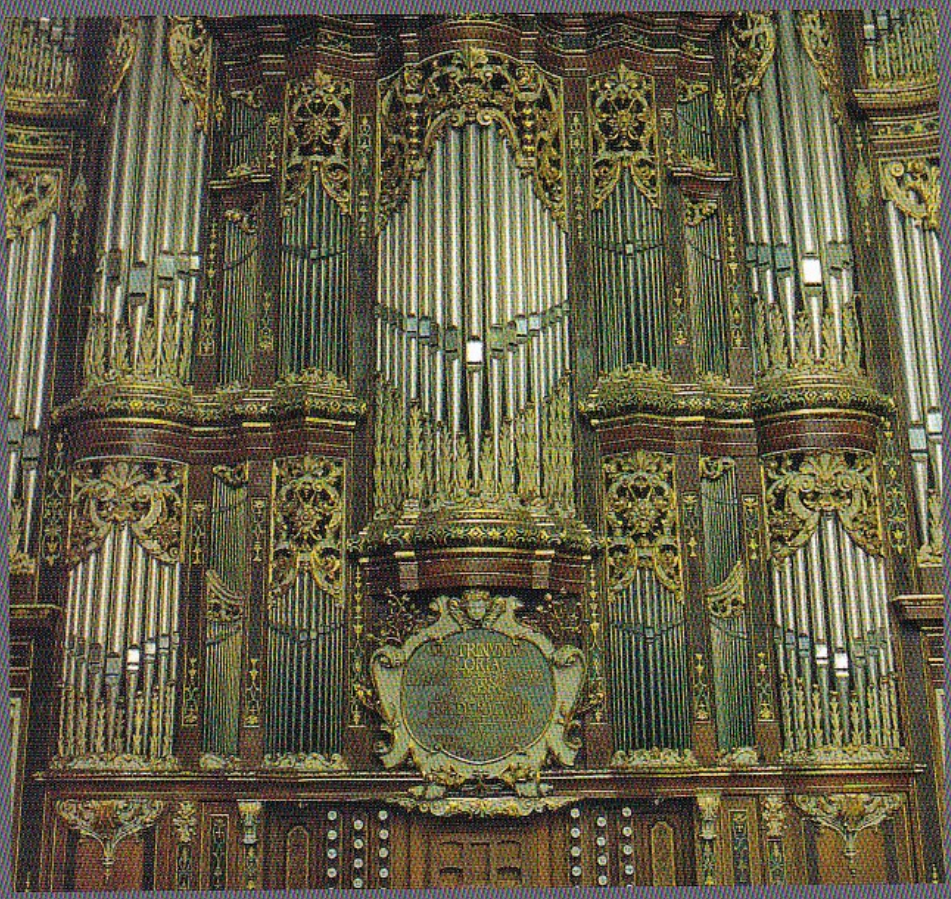
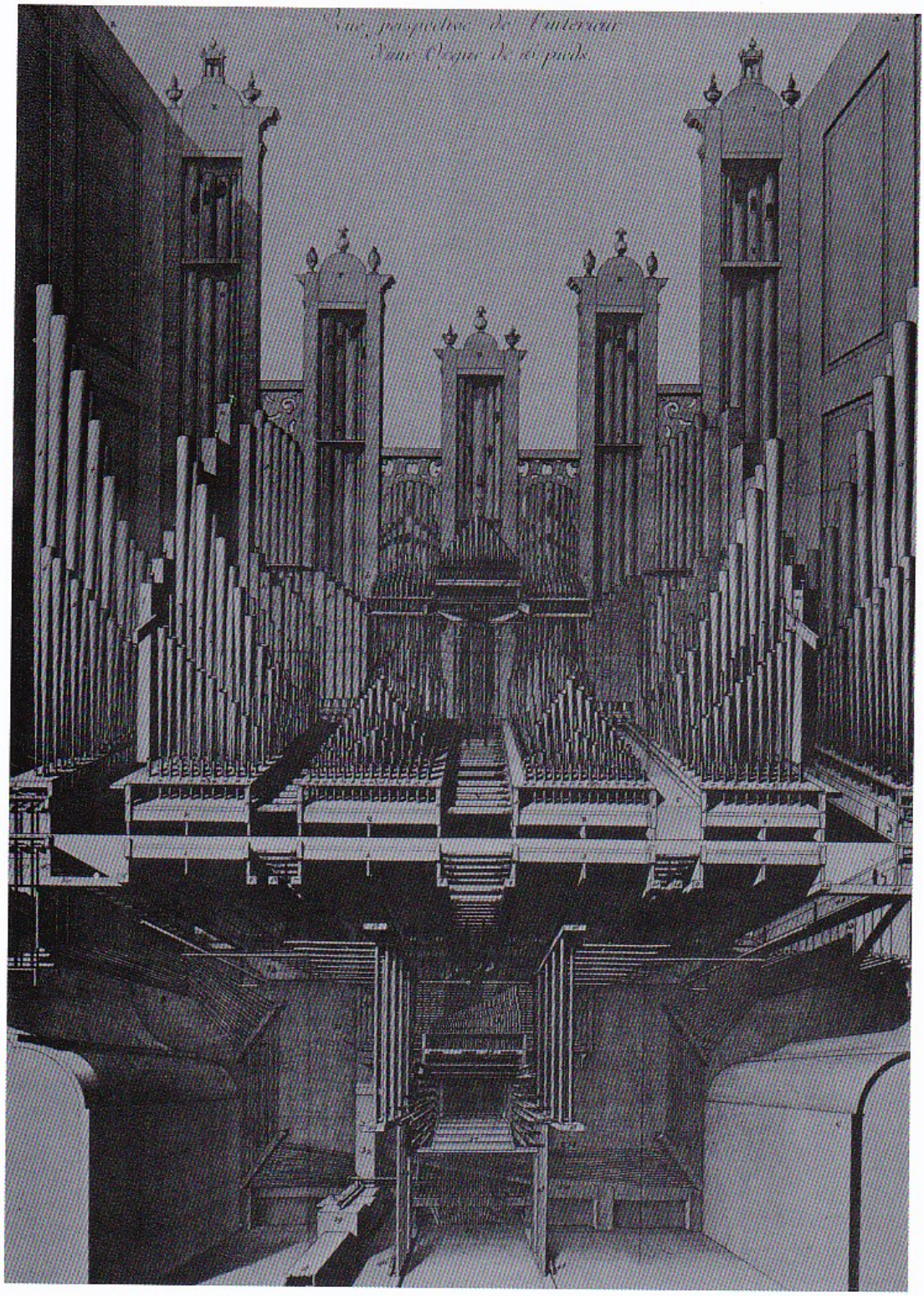


Winschermann先生への感謝を込めて

H.ヴィンシャーマン・メモリアルコンサート

主催　H.ヴィンシャーマン・メモリアルコンサート実行委員会
共催　盛岡市文化振興事業団　盛岡市



'23 **11月5日（日）** 14:00開演（13:15開場）

盛岡市民文化ホール 大ホール

主催／H.ヴィンシャーマン・メモリアルコンサート実行委員会
共催／盛岡市文化振興事業団　盛岡市

ヘルムート・ヴィンシャーマンを想う

翠ヴィンシャーマン

来るはずがないだろうと思っていた日が、やはり来てしまいました。2021年３月４日、最愛の夫、ヘルムート・ヴィンシャーマンが帰らぬ人となりました。それから時は、私の気持ちに容赦なく流れていき、２年半以上経ちました。最初はラジオから流れるバッハの曲全てを耳にすることもできませんでした。まして主人の演奏など、聴くことは残酷でした。時を経て、やっと最近主人のオーボエ、指揮した演奏が聴けるようになったのですが、やはり悲しい曲は今でも駄目です。先日主人のレコードを聞いていて、彼が吹くオーボエダモーレのある短い旋律が（音楽の捧げ物のテーマ）あまりにも音楽的で歌そのものだったので、どうしてこの単純なテーマにこのように命を与えることができるのだろうかと、涙が出る程感動しました。主人はオーボエの歌手と呼ばれていましたから、今更なんですが、久々に聴いて今までよりもっと深い発見ができたのです。その音楽をオーボエでなく、あの大きな手を通して合唱団からも、歌を引き出していました。それに合唱団の皆さんもよくついてきて下さっていました。主人の音楽をやっと聴けるようになった今、残していった何百枚のレコード、CDを少しずつあらためて聴いていきたいと思っていますが、私が生きている間に達成できるかどうか。

100年近くの長い音楽活動の人生で、色んな思い出話を聴いていると、おとぎ話みたいでした。ピアニスト、ルビンシュタインとのリハーサルでの会話、主人編曲のフーガの技法をブーレーズが演奏したり、ブリテンのピアノ伴奏でオーボエを吹いたとか。興味あるエピソードがたくさんあり、ワクワクしたものです。オーボエ奏者、教授、指揮者としてだけでなく、音楽学者でもあって、バッハだけに留まらず、ブラームス、マーラーまで多大な編曲を残しています。現在主人の残した膨大な楽譜を梯子に登って取り出し少しずつ見ていっていますが、編曲は手書きで、印刷したように丹精で美しい楽譜を見るとまるで絵画のようです。それにしても、なんと膨大な時間を費やして書いたのだろうかと、改めて驚嘆します。多くのコンサートやレッスンの合間を縫って書いていたのです。

また昔、図書館に通い、埋もれていた大変読みにくい楽譜を写真に撮りルーペで見ながら楽譜に書き写していました。テレマンの未知の曲も沢山世に広めその成果もあって、テレマン賞を授かりました。大変な根気がいったことは確かですが、主人は全て大変楽しんでやっていたのです。多くの編曲の楽譜、楽器をどう保存するかが今後私の課題と責任と思っていましたが、幸いバッハの編曲に関しては理想的な解決が見つかりました。しかし、主人の手書きの楽譜がなくなると、これまた淋しくなりますが、まだ他の作曲家のものも多くありますし、バッハ、モーツアルトの原典版全集、その他オーケストラ用の楽譜など、何千とあります。

主人と音楽について沢山語ったり、音楽の作り方、歌い方を教わりましたが、今からは、到底真似はできませんが、人生の生き方についても学ぶ事多々あります。一言でいって愛の人。自分も愛を沢山必要としましたが、人にも豊かに愛を与える人でした。人間愛、音楽への愛に溢れていました。常に物事をポジティブに捉え、愚痴を言うのをあまり聴いたことがありません。特に晩年は苦痛があっても不平、不満を言わず全てあるがままに謙虚に受け入れていました。そして音楽には厳しい人でしたが、心の広さ、包容力の大きさは、彼を知る人はどなたも感じとられたのではと思います。そして、何より自由で純粋な心の持ち主でした。音楽をするにも自由が必要ですから。

今は、今日のプログラムにありますカンタータ２７番の歌詞のように戦のない、環境破壊もない平和な天国で、神の右横にはバッハ、そのまた右横に一緒に座り、バッハと語らいながらこのコンサートを楽しみにしていると、私は信じます。

最後になりましたが、今回指揮者の佐々木正利氏をはじめ、出演者、関係者の方々が主人のことを想い、愛情をもってメモリアルコンサートを開催して下さることに、本当に心から感謝しております。

このコンサートに来てくださった聴衆の皆様にもお礼申し上げます。

Program

J.S.Bach

カンタータ　第93番 Wer nur den lieben Gott läßt walten

ただ愛しい神の統治に任せる者を

＜三位一体の祝日後第5日曜日のためのカンタータ＞

1.Chor
2.Choral und Rezitativ (Baß)
3.Arie (Tenor)
4.Arie (Duett : Sopran,Alt)
5.Rezitativ (Tenor)
6.Arie (Sopran)
7.Choral (Chor)

1.合唱
2.コラールとレチタティーヴォ (バス)
3.アリア (テノール)
4.アリア （ 二重唱 : ソプラノとアルト)
5.レチタティーヴォ (テノール)
6.アリア (ソプラノ)
7.コラール (合唱)

カンタータ　第27番 Wer weiß, wie nahe mir mein Ende

誰が知っていようか？私の終わりがいかに近いかを

＜三位一体の祝日後第16日曜日のためのカンタータ＞

1.Choral (Chor) und Rezitativ (Sopran,Alt,Tenor)
2.Rezitativ (Tenor)
3.Arie (Alt)
4.Rezitativ (Sopran)
5.Arie (Baß)
6.Choral (Chor)

1. 合唱 (コラール)とレチタティーヴォ (ソプラノ、アルト、テノール)
2.レチタティーヴォ (テノール)
3.アリア (アルト)
4.レチタティーヴォ (ソプラノ)
5.アリア (バス)
6.コラール (合唱)

カンタータ　第140番 Wachet auf, ruft uns die Stimme

目覚めよと呼ぶ声が聞こえ

＜三位一体の祝日後第27日曜日のためのカンタータ＞

1.Chor (Choral Fantasie)
2.Rezitativ (Tenor)
3.Arie (Duett : Sopran, Baß)
4.Choral (Tenor)
5.Rezitativ (Baß)
6.Arie (Duett : Sopran, Baß)
7.Choral (Chor)

1.合唱 (コラール・ファンタジー)
2.レチタティーヴォ (テノール)
3.アリア （二重唱 : ソプラノとバス)
4.コラール (テノール)
5.レチタティーヴォ (バス)
6.アリア （二重唱 : ソプラノとバス)
7.コラール (合唱)

Program notes

色々なジャンルのJ.S.バッハの曲の中で、カンタータなどの合唱を含む教会音楽は、その中心と言っていいでしょう。これらは主にライプツィヒの聖トーマス教会のカントルだった1723年から亡くなるまでに作曲されたものです。バッハはM.ルターゆかりの聖ゲオルク教会で洗礼を受けたルター派のプロテスタントでした。プロテスタントを指導したM.ルターは、平易な音楽を歌って信仰を深めることを図り、様々なコラールを作っています。色々な人がコラールを作っていますが、バッハもこのコラールの旋律を使って教会カンタータを作曲したのでした。

今日演奏される3曲は、バッハのカンタータの中から、バッハに生涯を捧げたH.ヴィンシャーマンの愛した、三位一体後の主日に演奏される3曲が選ばれています。

☆第一曲：カンタータ第93番
《ただ愛しい神の統治に任せる者を》BWV93

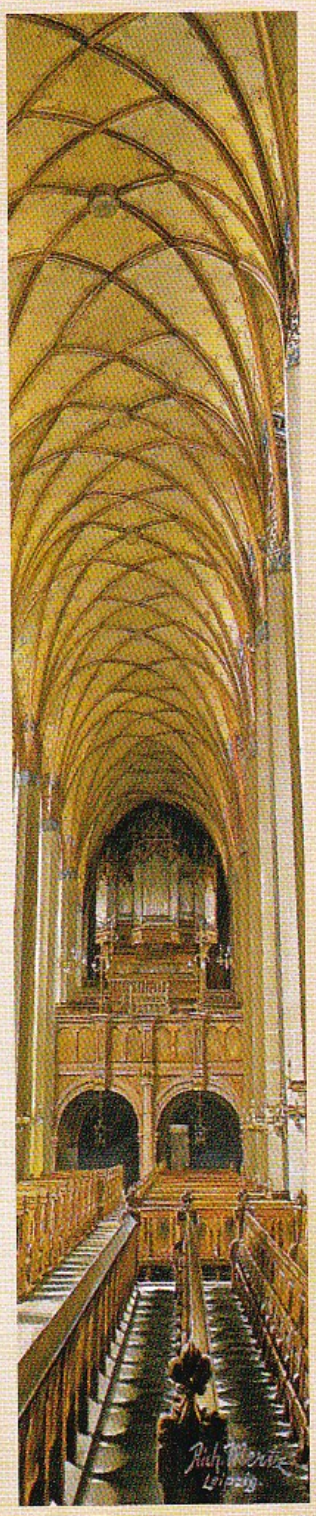
この曲は、「三位一体後第5主日」のために作られた曲で、カントル就任後2年目の1724年7月9日に作曲されました。歌詞はG.ノイマルクの作、旋律もノイマルクが編集したコラール集の旋律に基づいています。全ての楽章でコラール旋律が引用されています。

☆第二曲：カンタータ第27番
《誰が知っていようか？私の終わりがいかに近いかを》BWV27

この曲は、「三位一体後第16主日」のために作られた曲で、カントル就任後4年目の1726年10月6日に作曲されました。この日のテーマは、聖パウロの「エフェソスの信徒への手紙」の第３章の13～21節にある「最良の死」でした。歌詞はシュヴァルツブルグ=ルードルシュタット伯爵夫人A.ユリアによるもの、旋律は第一曲と同じ旋律です。１曲目の合唱は、三拍子でかつ途中にレチタティーヴォが挿入された珍しい曲です。終曲のコラールはJ.ローゼンミュラーが五声に編曲したものをそのまま使っています。

☆第三曲：カンタータ第140番
《目覚めよと呼ぶ声が聞こえ》BWV140

このカンタータは「三位一体後第27主日」のためのカンタータです。この主日はごく偶にしか現れないため、バッハがトーマス教会カントル在任中には２回しかありませんでした。プロテスタント教会の年間行事の教会暦では、「聖アンドレの祝日（11月30日）」に一番近い日曜日を「待降節第一主日」として暦の起点としています。しかし年によりこの日がずれるため、三位一体後第27主日はたまにしか現れないのです。この日は、教会暦の最後の主日です。キリストの再臨を迎える準備を怠らないようにという内容で、マタイの福音書にある「10人の乙女の喩え」がテーマになっています。この曲では牧師のP.ニコライの作曲したコラール旋律が使われています。



聖トーマス教会内部

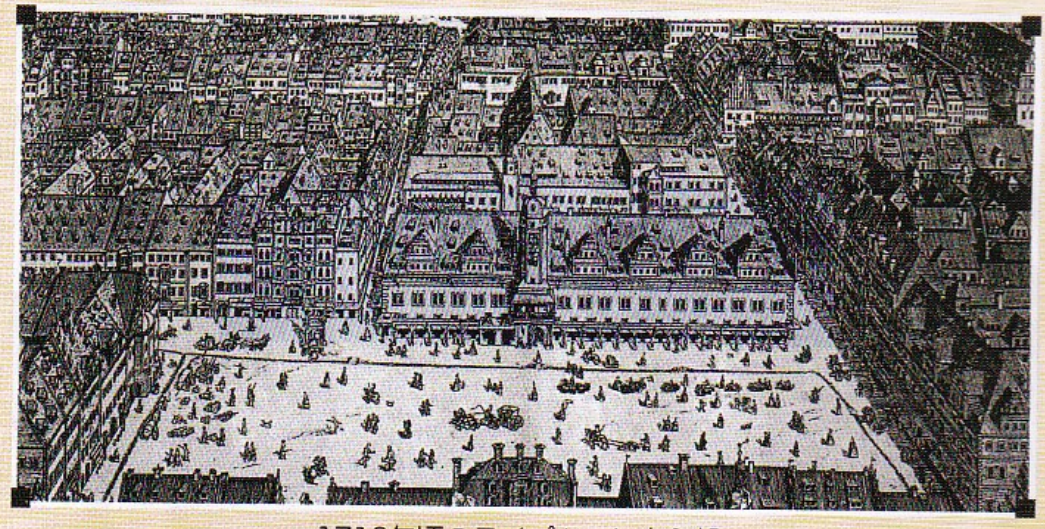
Maestro

佐々木正利

東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。同大学院修士課程及び博士後期課程修了。1980～82年デトモルト北西ドイツ音楽大学に学ぶ。1973年バッハの福音史家で楽壇デビュー以来、国際的バッハ歌手として数々の大舞台に出演。特に1980年ウィーン楽友協会でのマタイ受難曲や1985年ザルツブルグ音楽祭でのマニフィカト等では「世界最高のバッハ歌手の一人」と絶賛された。またライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、ベルリン交響楽団、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団、アムステルダム・フィルハーモニー管弦楽団、国立ブカレスト交響楽団、NHK交響楽団、ドイツ・バッハゾリステン等、国内外のトップオーケストラと共演。ライプツィヒ聖トマス教会聖歌隊、シュトゥットガルト・ゲヒンゲン聖歌隊、ベルリン聖ヘドヴィッヒ聖歌隊、RIAS室内合唱団等、世界的合唱団のソリストを度々務め好評を博す。在独中ウェストファーレン州立歌劇場等で「コジ・ファン・トゥッテ」「フィデリオ」「グリゼルダ」等に出演。

1982年日本に戻ってから40年間、多くの国際的歌手を育て上げ、また大学教授など多くの優れた指導者を輩出している。1994年長年にわたる顕著な演奏・教育の業績に対し、第47回岩手日報文化賞が贈られ、2011年には日独交流150周年を記念してドイツ大使館より日独友好賞（功労賞）が贈られた。

現在、岩手大学名誉教授。日本声楽発声学会会長他、複数の学会の要職も務める。二期会会員。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハ・カンタータ協会、東京21合唱団、各指揮者。バッハ・アンサンブル富山、岩手大学合唱団、東北大学混声合唱団、各常任指揮者。山響アマデウスコア、豊中市民第九合唱団、各音楽監督。熊友会ヴォーカル・アンサンブル代表。二期会バッハ・バロック研究会講師。



1712年頃のライプツィヒ中心部

Soloists

ソプラノ　**隠岐彩夏**

撮影：T.Tairadate

岩手大学教育学部卒業。東京藝術大学大学院修士、博士後期課程修了。文化庁新進芸術家海外研究員としてNYで研鑽を積む。友愛ドイツ歌曲コンクール第1位、日本音楽コンクール第1位他受賞多数。オペラでは《魔笛》《愛の妙薬》《ラ・ボエーム》等に出演。これまでにインバル指揮東京都交響楽団、ノット指揮東京交響楽団等と共演。キングレコードより矢部達哉、横山幸雄両氏と共演によるCD『 愛しの夜』をリリース（レコード芸術誌特選盤）。

アルト　**小野寺貴子**

岩手大学教育学部音楽科、東京藝術大学大学院(独唱科) 、マンハイム(声楽科) 、デットモルト音楽大学（歌曲科）卒業。声楽を佐々木正利、三林輝夫、磯貝静江、A.ラミレーツ、R.ウェーバーの各氏に師事。
2010年からロストック歌劇場ソリストとして活躍。これまで、ラインスベルク音楽祭やM.ボッシュ、A.ジョエル、E.シュテイーアなど数多くの指揮者、V.ネミロヴァなど演出家と共演。

テノール　**鈴木准**

モーツァルト『魔笛』タミーノ役で東京二期会、新国立劇場、日生劇場、兵庫県立芸術文化センター等のプロダクションに出演。他に『タンホイザー』ヴァルター、『サロメ』ナラボート、『カーリュー・リヴァー』狂女など。バッハ・コレギウム・ジャパンのベートーヴェン『オリーブ山上のキリスト』やシューベルト『ミサ第5番』等。録音では松本隆訳詞によるシューベルト『冬の旅』『白鳥の歌』。桐朋学園大学准教授。東京藝術大学講師。二期会会員。

バス　**田中雅史**

岩手大学教育学部芸術文化課程卒業。東京藝術大学声楽科を経て、東京藝術大学大学院修士課程声楽専攻を首席修了。同時に大学院アカンサス音楽賞、小川尚子賞海外派遣奨学金を受賞。
2020、2021年度公益財団法人野村学芸財団奨学生。
第34回奏楽堂日本歌曲コンクール歌唱部門第1位、中田喜直賞、木下記念賞（金）受賞。
声楽を西野真史、佐々木正利、川上洋司、Nicola Rossi Giordano、永井和子の各氏に師事。

H.ヴィンシャーマン・メモリアルオーケストラ

1993年のマタイ公演では、第1オーケストラにドイツ・バッハゾリステン、第2オーケストラには東京バッハ・カンタータ・アンサンブルが起用されました。爾来ヴィンシャーマン先生と度々共演してきた東京バッハ・カンタータ・アンサンブルは、1970年佐々木正利らが中心メンバーとなって創設された東京藝大バッハ・カンタータ・クラブのOBらによって組織されるオーケストラで、確かな技術と様式感に裏打ちされた洗練された芸術性で国内外より高い評価を得ています。

コンサートミストレス　**川原千真**

Vn 1	大谷美佐子	髙木聡		
Vn 2	花崎淳生	三輪真樹	上ノ山美香	宮崎桃子
Vla	李善銘	鈴木友紀子		
Vc	田崎瑞博	伊藤恵以子		
Cb	蓮池仁			
Ob	小畑善昭	酒井弦太郎		
E.H	戸田智子			
Fg	井上直哉			
Org	能登伊津子			

H.ヴィンシャーマン・メモリアル合唱団

ドイツ・バッハゾリステンを率いて、数多（あまた）のバッハの器楽曲の名演を世に送り出された巨匠H.ヴィンシャーマン先生が、1991年10月14日に盛岡バッハ・カンタータ・フェライン（以下「フェライン」と略）を指揮しカンタータ第140番、第211番（コーヒー・カンタータ）を共演されてから、佐々木正利が指揮するフェライン、仙台宗教音楽合唱団（同「宗音」と略）、岡山バッハカンタータ協会（同「岡山バッハ」と略）との長いお付き合いが始まりました。そして1993年には盛岡、仙台、岡山、東京にて、フェライン、宗音、岡山バッハの合同合唱で「マタイ受難曲」演奏会を催行し、これが恩師ヴィンシャーマン先生が指揮する初マタイとなったのです。その後、バッハの四大宗教曲の残り「ヨハネ受難曲」、「ロ短調ミサ」、「クリスマス・オラトリオ」も全て共演し（岡山バッハとは市販CDを収録し、レコード芸術誌では推薦盤を獲得）、宗教声楽曲の分野でも先生は世界的大家の名誉を獲得されたのです。その先生が、一昨年3月、101歳の長寿を全うし逝去されてから約2年半の歳月が流れましたが、即座に追悼演奏会を企画しようとしたにも拘わらずコロナ禍で能わず、今こうして生前の恩師に心からの感謝と御礼を込めてメモリアル合唱団を組織し、オーボエオブリガートの名カンタータ3曲（BWV27、BWV93、BWV140）をお届けします。なお合唱団にはフェライン、宗音、岡山バッハの他に、佐々木が指導する山響アマデウスコアの有志も加わっています。

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン：1977年2月に「J.S.Bachの教会カンタータの研究と演奏を通して音楽芸術を追求する」ことを目的に結成。当初より佐々木正利氏を指導者として迎え、バッハの音楽の真髄に触れる活動を目指して多くの演奏会を行う。客演指揮者としてH.ヴィンシャーマン、G.シュマールフス、D.ティム、K.マズア、H.リリング、D.エッティンガー、H.シェレンベルガー、H.J.ロッチュ、岩城宏之、飯森範親らと、バッハからマーラーまで幅広い曲目を演奏。現在までドイツへの演奏旅行を5回行い現地で高い評価を得た。Bach-Archiv, Leipzigの招待で2024年6月ドイツLeipzigで開催されるバッハ音楽祭への出演が決まっている。（練習ピアニスト：菊池 玲子）

仙台宗教音楽合唱団：1967年創団。ドイツ・バロック期の宗教合唱曲を中心にすえて活動してきた。1982年以降、佐々木正利氏を指揮者に迎え、バッハのいわゆる4大宗教曲の演奏会を完遂。近年はモーツァルト、ブラームス、フォーレなどの有名宗教曲から、デュルフレ、ローリゼンといった近・現代の宗教曲までレパートリーを広げている。また、2013年より10年間、佐々木正利氏の指揮する他の合唱団と共に「3･11祈りのコンサート」の活動に参加し、毎年3月11日にモーツァルト・レクイエムを捧げてきた。2024年4月21日(日)には、バッハのカンタータ（第4番、93番）等をプログラムとした第39回演奏会を6年ぶりに開催する予定である。（練習ピアニスト：渡辺 真理）

山響アマデウスコア：音楽監督に佐々木正利・岩手大学名誉教授、指揮者に渡辺修身・山形大学教授を迎え、山形交響楽団のモーツァルト交響曲全曲演奏会「アマデウスへの旅」シリーズに出演することを目的に2008年結成。以来、同交響楽団附属の合唱団として、モーツァルトに留まらないオペラやミサ曲、オラトリオなど数々の合唱付きの大曲を演奏し、県内外から高い評価を得ている。2023年7月には、合唱団創立15周年を記念して単独の特別演奏会を開催し好評を博した。（練習ピアニスト：菅原 美穂）

岡山バッハカンタータ協会：1985年の小澤征爾指揮によるバッハ「ロ短調ミサ曲」の演奏会をきっかけに、1987年バッハカンタータ演奏を目的に結成。指揮に佐々木正利氏を迎え、地方都市岡山を本拠地としながらH.リリングら世界の冠たるバッハ指揮者と共演し、高い評価を獲得。芸術性の高い合唱団として現在に至る。H.ヴィンシャーマンとは、1993年以来バッハの「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」「ロ短調ミサ曲」「クリスマスオラトリオ」を東京他で共演し、ライブCDを発売した。東日本大震災に際し、2011年5月ライプツィヒ「聖トーマス教会」に於いて復興支援のためのチャリティーコンサートへ出演。また、2016年3月、ブラームスの「ドイツ・レクイエム」をH.ヴィンシャーマンの弟子のH.シェレンベルガーと共演し、第4回ウィーン・フィル&サントリー音楽復興祈念賞を受賞した。（練習ピアニスト：上森 佳枝）

Members

ソプラノ	赤塚 温子	安達 真弓	飯淵 正子S	石澤 悦子S	石澤 信子S	大友 利恵S	大矢 克子
	岡野 美映子	岡山 ひかり	小原 育世	熊谷 沙也加	熊谷 充代	熊澤 愛理	後藤 直子S
	小林 澄子S	小平 慶子S	昆 千晶	近藤 順子S	斉藤 純子	佐々木 恵子	菅原 幸菜Y
	高瀬 佳子S	竹内 望S	圓谷 範子S	外崎 麻子	中軽米ことみ	中野 繭子	福田 良子S
	藤原 弘子	真下 祐子	増田 明子S	三浦 香苗S	本良 いよ子	八木 絵未	山根 日和
	山室 ふさ子S	吉田 真弥子					
アルト	植松 智穂S	大江 明子Y	大場 啓子S	小笠原 香澄	小川 暁美	金子 千鶴	桐原 絹子
	黒沢 結衣Y	今野 早苗S	佐々木 温	佐々木美智子	佐竹 圭子Y	下永 恵美子S	杉井 知子S
	鈴鴨 よしみS	鈴木 英美S	高瀬 直子Y	田口 千紗都	田村 淑子S	畠山 三枝子S	早坂 陽子S
	廣澤 真紀子	福岡 牧子Y	藤澤 久子	細梅 睦子Y	水戸 由貴子S	三宅 真佐子	茂木 史
	茂木 容子	八尾 敦子S	柳父 かほるS	矢野 道子S	渡辺 しおり		
テノール	太田 純功Y	岡本 敏男S	加藤 充美O	加藤 進也	川野 耕大	河原 清S	北岡 倫典S
	佐々木 幹雄	武田 宏	長岡 朋希	中野 奏保	藤澤 健	前原 浩人O	吉岡 拓輝
	吉谷地 勝久						
バス	石川 賢S	遠藤 剛Y	小原 一穂	小菅 悠樹	佐々木 保雪	佐藤 和久	宍戸 多加志S
	鈴木 孝裕S	高橋 聡	田村 高幸S	遠山 宜哉	芳賀 郁夫	廣澤 昭典	大和 敏憲

無印：盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、S：仙台宗教音楽合唱団、Y: 山響アマデウスコア、O：岡山バッハカンタータ協会

ヴィンシャーマン先生の足跡

バッハの権威として101歳になる直前までその影響力を音楽界に与え続けたヴィンシャーマンは、1920年3月22日、ドイツのルール地方に生まれ、エッセンとパリで学び、アムステルダムのコンセルトヘボウ管弦楽団、フランクフルト放送管弦楽団などのソロ・オーボエ奏者を務めた後、1960年ドイツ・バッハゾリステンを創立。以来、芸術監督として50年、この室内オーケストラを特にバッハ演奏において世界的権威を誇る演奏団体に育てあげた。また、優れた教育者としても知られ、シェレンベルガー、宮本文昭、ゴリツキ、シュマルフスなど優秀な後継者を輩出した。指揮者としても、世界各地のオーケストラに客演しており、日本では2014年の大阪フィルとの「マタイ受難曲」が最後の演奏となった。

岡山バッハカンタータ協会や盛岡バッハカンタータフェライン、仙台宗教音楽合唱団ともしばしば共演し、「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」「ロ短調ミサ曲」「クリスマス・オラトリオ」のCD録音も行っている。

長年の文化的功績が称えられ、ドイツ政府より最高の一等功労十字勲章などを、1992年には、ロンドン王立音楽アカデミー委員会で満場一致で「名誉会員」の称号を授与された。2013年には、テレマンの生地マグデブルク市より「ゲオルグ・フィリップ・テレマン賞」を贈られた。

ヴィンシャーマン先生からのメッセージ

「音楽の友」 第78巻第7号p98–100より

■音楽の力について

いまも昔も、音楽と社会の関わりは変わっていません。人間の成長においても、音楽はポジティヴな力を持っています。クラシックであれ、他の分野であれ、音楽すべてです。
音楽は、歌うことから始まります。歌えると、楽器も演奏したくなります。音楽は、人々を慰め、勇気づけ、喜びを与える力があります。子供たちの成育過程において、頭脳を発達させ、集中力の強化効果があることが実証されています。精神に良い影響を与えたり、病気を治したり、ときに寿命を延ばすこともあり得ます。現に、精神的な病気に対して、音楽による治療法が行われています。

■次の世代に託したいこと

まず、平和な世界を築く努力をしてほしいです。いつもポジティヴにものを考えてください。そして、たくさん歌うように！歌を忘れないでほしい。

「ヴィンシャーマン先生、弟子と言っていいですか！」

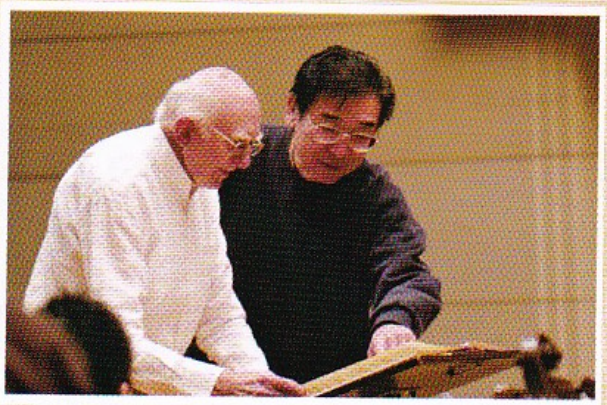
佐々木正利

今私の手元に四つのスコアがあります。バッハの四大宗教曲（という呼び方は私は好きではありませんがここは時世に合わせます）マタイ、ヨハネ、ロ短調、クリオラ（これらの呼び方も同様に好きではありません）のスコアで、すべてヴィンシャーマン先生との共演に際し、先生からの手書きでの指示書き込み楽譜を頂戴したものです。その中には、ボンの先生宅にお邪魔して、先生から直接指示、教えをいただいたものもあります。長ソファに一緒に座って、一々ここはこうこうで、そことはこう違えるよ、等々、懇切丁寧に音楽的指示をいただいた貴重な譜面です。そのさなか、ご自身の経験や熱き想いを吐露されることも多々あって、私にとってはまさに至福の時でした。そんな先生の、バッハに傾ける、ほとばしるような情熱をストレートに注入された私は、少なくとも声楽作品に関しては、ヴィンシャーマン先生からの濃い教えをいただけた世界一の特異者、果報者だと自負しています。

その先生が逝かれました。全くもって信じられない思いです。奥様の翠さんも私への私信で「私も、主人は、絶対に亡くならないと思っていました。まだ、信じられません」と書き綴っておられます。先生はこの世におられなくなっても、その音楽は永遠に私たちの心の中に存在し続ける、なんて言葉はまるで意味なさぬ言葉にすら思えます。それほど先生には、まだまだ教えていただきたいのです。故人として偲びたくはないです。この先もずっと、直裁の師匠として生気あふれる顔立ち、大きな手で私たちの前に立ち続けてほしいです。巨星墜つ、認めなきゃいけませんか、先生！

私が大学生の頃、愛聴していたバッハ演奏は順不同で以下のものでした（何故か、当初は器楽ばっかり聴いていて声楽曲にはほとんど興味がありませんでした）。カール・ミュンヒンガー指揮シュトゥットガルト室内管弦楽団、カール・リヒター指揮ミュンヘン・ バッハ管弦楽団、コレギウム・アウレウム合奏団、ヘルムート・ヴィンシャーマン指揮ドイツ・バッハゾリステン、ジャン=フランソワ・パイヤール指揮パイヤール室内管弦楽団、それにバッハものではありませんがヴィヴァルディ「四季」のイ・ムジチ合奏団です。これらは私にとって、トスカニーニ、ワルター、フルトヴェングラーに匹敵するほどの憧れ、花形演奏家たちでした。

一般的に歴史的人物や別次元のスターのことは敬称などつけずに呼び捨てにするものですが、そのうちの一人、ヴィンシャーマンを「先生」と呼ぶようになったのは、私が留学したデトモルト北西ドイツ音楽大学の看板教授の一人として先生が君臨していたからに他なりません。あのヴィンシャーマンが身近な師の一人として同じ学府構内を悠々と歩いているのです。しかし彼は神様です。特にオーボエ専攻の学生にとってはまさに雲の上の存在。門下生にインゴ・ゴリツキー、ハンスイェルク・シェレンベルガー、ゲルノート・シュマールフス、宮本文昭ら名だたるオーボイストが輩出されていることからもそのすごさがわかろうというものです。私は当時、デトモルトの郊外のハイリゲンキルヒェンに住んでいて、途中野外博物館（LWL-Freilichtmuseum Detmold）のある大きな森の中を徒歩で大学まで通っていましたが、音大は分野別に建物が分かれていて、私の通うSängerhaus（声楽棟）へはBläserhaus（管楽器棟）の前を通っていくのですが、その前で見かける柔和な表情のヴィンシャーマン先生とお弟子さんたちの緊張しきった顔の対比に、ただただすごいお人なんだなと・・・。レコード（今でいうCD）の中の神格者がそこにいるというだけで感無量になっていたものです。



それから数年後のこと、私は帰国して一応国際的歌手として各地で歌っていましたが、日本の若手音楽家に、世界の優れた演奏家から直接指導を受ける機会を設けることを目的として、1980年より今も続いている草津国際音楽祭で、ヴィンシャーマン先生と共演する機会を得たのです。先生がタクトを取られて群馬交響楽団と特別編成の合唱団を従えマタイ受難曲の抜粋を演奏したのでしたが、福音史家とテノールソロを担った私は、何と第1部第20曲のアリア「私はイエスのもとで目を覚ましていよう」を、先生のオブリガートオーボエで歌う栄誉に浴することができたのでした。その時のことです。数年ぶりにお会いする（といっても私のことなんか覚えてはいらっしゃらないとは思いましたが）世界的大音楽家（grande maestro del mondo）との対面でコチコチになっていた私に、先生は「ハイ、ササキさ～ん、お元気ですか？ お子さんは大きくなりましたか？」と声をかけてくださったのです。そうなんです。先生は、夫婦で子連れ留学していた私が、レッスンに向かうためにベビーカーを押してBläserhaus（管楽器棟）の前を通っていく姿をしっかりと目に留めてくださっていたのです。それほど愛情深い先生であることを、幸運にも私は40年以上にもわたって身をもって体験し、弟子に対し、音楽に対して真摯にあり続けることを教えていただけたのは本当に幸せなことでした。

さて、先生と盛岡バッハ・カンタータ・フェラインのお付き合いはいつから、どのようにして始まったのか、はっきりとは覚えてはいません。このこと自体、大恩師に対して甚だ失礼な話ですが、それだけ長く、そして深く、憧れと信頼で結びついてきたと言えるのではないでしょうか。その曖昧な記憶を辿りますと、1980年代の半ごろから後半にかけて、先生は、戦後の我が国の宗教音楽合唱界の仕掛け人で牽引者の一人である後藤田篤夫さん率いる、宗教音楽研究会合唱団の演奏会に度々客演され、ソロを担った私とも交流がありましたが、演奏会のたびごとに私が合唱指導のお手伝いをしたことや、当の後藤田さんがフェラインに興味を持たれて（後にはついに東京在住なのに会員となられた）盛岡の合唱団の話題がしきりに持ち上がったこともあって、先生との共演が実現に近づいていったような気がします。

そして確か1991年のことだったと思いますが、ドイツ・バッハゾリステンの演奏会で初めてフェラインは合唱を担い、カンタータの第140番「目覚めよと私たちを呼ぶ声がする」と第210番「お静かに、おしゃべりしないで！」（コーヒーカンタータ）でご一緒したのでした。その時の感動は忘れもしません。リハーサルで先生の大きな手が振り降ろされ、140番の１曲目の前奏オケが「ザッ、ザザッ、ザザッ、ザザ～！」と付点を刻むやいなや、背筋にビィ～ん！と電気が走りました。続けてオーボエと第１ヴァイオリンが交互に旋律モティーフをキャッチボールしだすと、もうワクワク感がとめどもなく突き上げてきます。何ということでしょう、この高揚感、この生命感、この覚醒感！ それだけではありません。第3曲のイエスとシオンの娘の二重唱では、しっとりと美しい求愛の歌が極上のカンタービレとして心に染み込んでくるではありませんか。次のテノールの単旋律コラールでは、弦楽のトゥッティが格調高いオブリガートを奏で、ついにはお互いを克ち得たイエスと魂の心弾む喜びのデュエットを経て、力強くも充溢感のある四声体の漲りコラールで締めくくるのです。この音楽的語彙力は何ですか、どこからくるのですか？ 先生の音楽との出会いは斯様にショッキングなものでした。尤も先生も、地球地図の東の端（欧米の世界地図は大西洋が真ん中）の仏教国で、ドイツ語を話さない音楽的僻地と言ってよい私たちに少なからぬ興味と関心を覚えられたようで、程なくドイツで発刊された「ドイツ・バッハゾリステン珠玉の演奏CD」の最初と終わりに、器楽曲の名演を挟んで、この140番の冒頭合唱曲と終曲コラールが収録されていたことには深い感動、感慨を覚えました。

今、先生の突然の訃報に接し、にわかには受け入れられない感情に打ちひしがれながらも、先生に対する感謝の思いを書き連ねておきたいとキーボードの前に座っています。こうして思

い返してみますと、先生への感謝と数々の思い出は尽きることは決してありませんが、その思いは一生かけて吐露し続けていくこととして、本稿の最後に、私なりに感ずる先生の音楽の魅力と、先生が私にかけてくださった印象的なお言葉の2、3を紹介して拙文を締めます。

先生が教えてくださったことは次の二つの言葉に集約されます。即ち、「生きる」ということと「愛する」ということです。

音楽が生きるとはどういうことか。それはその音楽が刹那刹那に十分魅力を発揮していなければならないということです。どういう扱いをしたなら魅力を発揮できるのか、どうアプローチしたなら輝きを増すのか。リズムで作るのか、テンポなのか。音量のバランスなのか、ハーモニーの整えなのか。歌心の発揚なのか、ふさわしい音色の選択なのか。アゴーギク、ルバートの用い方なのか、対位法的処理なのか。様式なのか、編成なのか。唱法・奏法なのか、語感なのか、etc....。バッハの音楽がまさにそうであるように、どんなアプローチすらも、そこに生気があれば、面白さがあれば、感動があれば、存在感が否定されることはない。そのためには、独りよがりがあってはならない。それが独断と偏見により作り上げられ支配されるようであってはならない。常に作品と、自分と、共演者と、そして聴衆と対話し、それが通ずる、生きていると実感できなければならない。それを生み出す根底には、音楽を愛する心、慈しむ心、プレーヤーを尊重する心、作曲者を、詩人を、言葉を、環境を、習慣を知る努力が大切である。そしていつも全力投球をすること。また真っ先に自分が楽しむこと。幸せな自分を見ると相手も幸せになる。音楽ではそれが第一だ。気持ちを乗せられずに気がかりなことを抱え込みながらする音楽に、周りの者たちが共感を覚えられるはずがない。いつも能動的に、繊細に思いやりを持って音楽と対峙しなさい、そのように先生は私たちに教えてくださいました。先生、大丈夫です。私たちは決して忘れませんよ、音楽を、作品を、共演者を、聴衆を愛するということを。

先生が私に仰ってくださった言葉は数々ありますが、どうでもいいこと（なのかどうか？）の一つに、「ササキさん、あなたはテノールじゃありません、バリトンです」というのがあります。「えっ、ウッソ~っ！」と思いましたが、この点については未だ悩んでいる自分がいます...!!??

もう一つ。世界にはトーマスシューレ（Schule　とはドイツ語で学校のこと）、リヒターシューレ、リリングシューレ、コルボシューレといった「バッハ学校」がありますが、日本にもれっきとした「バッハ学校」があります。それはササキシューレです、と仰ってくださったことです。そして、それはササキさんがいる限り不滅です、とも。嬉しかったですね。

先生、肝心なことを忘れてはいやしませんか、私たちにとって一番肝心なことを。それは世界に燦然と輝く「バッハ学校」があるということです。そうです、それは他でもない、ヴィンシャーマンシューレです。このシューレからは夥しい数の門下生が輩出されました。孫弟子、ひ孫弟子まで数えると一体何人になるのでしょうか。そこでのお願いです。天国におられる先生、私を、佐々木をヴィンシャーマンシューレの門下生に加えていただけませんか。私に、私はヴィンシャーマンの弟子です、と言うことを許していただけませんか。それほど先生の教えは私の強い糧となっているのです。先生の教えは必ず実践して、必ず後世に伝えていきます。常に、その音楽の生き生きとした姿、表情を具現化することを誓いますから。

バッハの音楽は「地味」「退屈」「難しい」というように、ネガティブな印象を抱いている方も多いでしょう。でも違いますよね。先生と一緒に音楽しているとそんなことは全然感じたことはありませんでした。私たちの使命は、それを実践して皆でバッハを楽しめるようにすることです。そう、先生の孫弟子、ひ孫弟子、玄孫（やしゃご）弟子たちと共にね。

(2021.3.15. 記す)

H.ヴィンシャーマン日本公演のCD

「ヨハネ受難曲」BWV245
東京・サントリーホールでのライブ録音
1995.11.9
ナミレコード　WWCC7288～89

「クリスマス・オラトリオ」BWV248
東京オペラシティコンサートホールでの
ライブ録音　2000.12.2
ナミレコード　WWCC7407～08

「ミサ曲　ロ短調」BWV232
岡山シンフォニーホールでのライブ録音
1998.11.22
ナミレコード　WWCC7341～42

「マタイ受難曲」BWV244
倉敷市市民会館でのライブ録音
2003.12.7
ナミレコード　WWCC7491～3

歌詞対訳　三ヶ尻 正

東京大学英文科卒。ヘンデル研究・オラトリオ研究、声楽家の発音指導(英・独・羅)、字幕・対訳制作に従事。言語指導では文学的かつ科学的なアプローチに、字幕・対訳では原典のことばを大切にしたわかりやすい日本語訳に定評がある。著書に『歌うドイツ語ハンドブック』『ヘンデルが駆け抜けた時代』など。新国立劇場オペラ研修所講師、国立音楽大学大学院および大阪音楽大学大学院非常勤講師。
日本音楽学会、日本ヘンデル協会、日本イタリア古楽協会会員。

J.S.バッハ：カンタータ第93番《ただ愛しい神の統治に任せる者を》
J.S. Bach: Kantate „Wer nur den lieben Gott läßt walten“ BWV 93

※Choraltexte in gotischer Schriftart

1. Chor

Wer nur den lieben Gott läßt walten
und hoffet auf ihn allezeit,
den wird er wunderlich erhalten
in allem Kreuz und Traurigkeit.
Wer Gott dem Allerhöchsten traut,
der hat auf keinen Sand gebaut.

2. Choral und Rezitativ [Baß]

Chor: Was helfen uns die schweren Sorgen?
Rez.: Sie drücken nur das Herz
mit Zentnerpein, mit tausend Angst und Schmerz.
Chor: Was hilft uns unser Weh und Ach?
Rez.: Es bringt nur bittres Ungemach.
Chor: Was hilft es, daß wir alle Morgen
Rez.: mit Seufzen von dem Schlaf aufstehn
und mit beträntem Angesicht des Nachts zu Bette gehn?
Chor: Wir machen unser Kreuz und Leid
Rez.: durch bange Traurigkeit nur größer.

Drum tut ein Christ viel besser,

er trägt sein Kreuz mit christlicher Gelassenheit.

3. Arie [Tenor]

Man halte nur ein wenig stille,
wenn sich die Kreuzesstunde naht,
denn unsres Gottes Gnadenwille
verläßt uns nie mit Rat und Tat.

※ゴシック体フォントはコラール(讃美歌)の歌詞です。

1. 合唱

ただ愛しい神の統治に任せ
いつも神を待ち望む者を、
神は驚くほど見事に守って下さるでしょう、
あらゆる十字架と悲しみの中にあっても。
神、いとも気高き方を信じる者は
砂上の楼閣を建てることにはなりません。

2. コラールとレチタティーヴォ[バス]

コラール：この重い悩みは私たちに何の助けとなるでしょう?
レチタティーヴォ：それはただ私の心に100ポンドもの痛み、
千もの不安と痛みの重しを載せるだけ。
コラール：「悲しい」「ああ」という声は何の助けになりますか?
レチ：　それはただつらい災いを呼ぶだけ。
コラール：何が助けてくれるでしょう？
レチ：　私たちが毎朝眠りの溜め息から目覚め、
夜には涙に濡れた顔で寝床に就くとき。
コラール：私たちは自分たちの十字架と苦悩を
レチ：　不安な悲しみを通じてただ大きくするばかりです。

それゆえ、キリスト者はそれよりも
ずっとよいことをしているのです。
彼は教えにかなった落着きをもって
自分の十字架を背負うのです。

3. アリア[テノール]

自分の十字架のときが迫って来たときも
少しの間静かにしていなさい。
なぜなら私たちの神様の慈悲の御意（みこころ）は私たちを
ことばでも行ないでも決して見棄てないからです。

Gott, der die Auswerwählten kennt,
Gott, der sich uns ein Vater nennt,
wird endlich allen Kummer wenden
und seinen Kindern Hilfe senden.

神は、選ばれた民ご存知の方は、
神は、私たちに父と呼ばれている方は、
ついにはすべての苦悩の進路を逸らせ
ご自身の子らに救いを届けてくれるでしょう。

4. Arie (Duett) [Sopran, Alt]

Er kennt die rechten Freudenstunden,
er weiß wohl, wenn es nützlich sei.
Wenn er uns nur hat treu erfunden
und merket keine Heuchelei,
so kömmt Gott, eh wir uns versehn,
und lässet uns viel Guts geschehn.

4. アリア(二重唱)[ソプラノとアルト]

神は真の喜びの時を知っています。
神はそれをいつ役立てたらいいか、よくご存知です。
私たちが誠実だと見極めて下さるなら、
見せかけでないと気付いて下さるなら、
私たちが気付く前に、神は来て下さり、
多くの善きことを私たちに起こして下さるのです。

5. Rezitativ [Tenor]

Adagio: **Denk nicht in deiner Drangsalhitze,**
Allegro: wenn Blitz und Donner kracht
Andante: und die ein schwüles Wetter bange macht,
Adagio: **daß du von Gott verlassen seist.**
Rezitativ: Gott bleibt auch in der größten Not,
Ja gar bis in den Tod
mit seiner Gnade bei den Seinen.

Du darfst nicht meinen,
Adagio: **daß dieser Gott im Schoße sitze,**
Rez.: der täglich wie der reiche Mann,
in Lust und Freuden leben kann.

Adagio: **Der sich mit stetem Glücke speist,**
Rez.: bei lauter guten Tagen,
muß oft zuletzt,
nachdem er sich an eitler Lust ergötzt,
„Der Tod in Töpfen“ sagen.

Adagio: **Die Folgezeit verändert viel!**

Rez.: Hat Petrus gleich die ganze Nacht
mit leerer Arbeit zugebracht
und nichts gefangen:
auf Jesu Wort kann er noch einen Zug erlangen.
Drum traue nur in Armut, Kreuz und Pein
auf deines Jesu Güte
mit gläubigem Gemüte.
Nach Regen gibt er Sonnenschein
und setzet jeglichem sein Ziel.

5. レチタティーヴォ[テノール]

ゆっくり：**自分の苦悩の熱にかられていても思ってはならない、**
はやく： たとえ稲妻や雷が轟音を立てても、
歩く速さで：それにむせ返るような天気で不安になっても、
ゆっくり：**お前が神に見捨てられている、などと。**
レチタティーヴォ: 最もひどい苦境のときも神はおいでになる。
そう、死のときまでその慈悲とともに
ご自身の民のそばにいて下さる。

お前は考えてはならない、
ゆっくり：**こんな者を神が懐に座らせているなどと、**
レチタティーヴォ： 金持ちのように快楽と愉悦のうちに毎日
安穏と過ごしている者を。

ゆっくり：**いつも幸運を味わってきた者、**
レチタティーヴォ： 見るからに良き日々を味わってきた者は
虚しい快楽に興じた挙句、
しばしば最後になって
『鍋に死[に至らしめる毒]が入っていた』などと
言うものだ。
*[自分の罪を忘れ、苦しむのは他人のせいだと言う、の意]

ゆっくり：**あとに続く時間は大きく変わるものなのだ！**
*[信仰の有無によって人生・来世は大きく変わる、の意]

レチタティーヴォ： たとえペテロが夜中じゅう
空しく働いて何の収穫も得られなかったとしても、
イエスの言葉があれば
まだもう一度網一杯の獲物を獲ることができる。
それゆえ、貧困や十字架や苦痛を負っていても
信心深い心で、
あなたのイエスの善を信じなさい。
彼は雨の後に太陽の光を下さり
どんな人にも行き先を決めて下さるのだ。

6. Arie [Sopran]

Ich will auf den Herren schaun
und stets meinem Gott vertraun.
Er ist der rechte Wundermann,
der die Reichen arm und bloß
und die Armen reich und groß
nach seinem Willen machen kann.

6. アリア[ソプラノ]

私は主を見ていよう。
そして私の神をいつも信じていよう。
彼はまさに驚くべき人です。
その御意（みこころ）のままに
金持ちを貧しく裸にし
貧乏人を豊かに偉大にすることのできる人なのです。

7. Choral [Chor]

Sing, bet und geh auf Gottes Wegen,
verricht das Deine nur getreu
und trau des Himmels reichem Segen,
so wird er bei dir werden neu;
denn welcher seine Zuversicht
auf Gott setzt, den verläßt er nicht.

7. コラール[合唱]

歌いなさい、祈りなさい、そして神の道を行きなさい。
あなたの神のみに忠実に事を成しなさい。
そして天の豊かな恵みを信じなさい。
それがあなたには新しい恵みとなるでしょう。
なぜなら堅い期待を神に置く者を
神が見棄てることはないのですから。

J.S.バッハ：カンタータ第27番《誰が知っていようか？私の終わりがいかに近いかを》
J.S. Bach: Kantate „Wer weiß, wie nahe mir men Ende“ BWV 27

※Choraltexte in gotischer Schriftart

※ゴシック体フォントはコラール（讃美歌）の歌詞です。

1. Choral [Chor] und Rezitativ [Sopran,Alt,Tenor]

Choral: **Wer weiß, wie nahe mir mein Ende?**
Sopran: Das weiß der liebe Gott allein,
ob meine Wallfahrt auf der Erden
kurz oder länger möge sein.
Choral: **Hin geht die Zeit, her kömmt der Tod,**
Alt: Und endlich kömmt es doch so weit,
daß sie zusammentreffen werden.
Choral: **Ach, wie geschwinde und behende**
kann kommen meine Todesnot!
Tenor: Wer weiß, ob heute nicht
mein Mund die letzten Worte spricht!
Drum bet ich alle Zeit:
Choral: **Mein Gott, ich bitt durch Christi Blut,**
mach's nur mit meinem Ende gut!

1. 合唱（コラール）とレチタティーヴォ[ソプラノ、アルト、テノール]

合唱： **誰が知っていようか？私の終わりがいかに近いかを。**
ソプラノ： 知っているのは愛しい神様だけです。
私の現世の巡礼が
短いかもっと長くなるのかを知っているのは。
合唱： **時は去って行く、死はやって来る。**
アルト： そしてついには、いつか遠くの日に
時と死が相まみえることとなる。
合唱： **ああ何と素早く、なんとたちまちに**
私の死の苦悩が訪れ得ることか！
テノール： 誰が知っていようか？私が最後の言葉を
口にするのが今日でないかどうかを。
それゆえ私はいつも祈るのです。
合唱： **わが神よ、私はキリストの血を通じてお願いします。**
ただ私の最後の時をよきものとして下さい！

2. Rezitativ [Tenor]

Mein Leben hat kein ander Ziel,
als daß ich möge selig sterben
und meines Glaubens Anteil erben;
drum leb ich allezeit
zum Grabe fertig und bereit,

2. レチタティーヴォ[テノール]

私の人生には、これ以外の目的はありません。すなわち
幸せに死んで行けることと
私の信仰がその報いを受け取れることだけです。
それゆえ私はいつも
墓に入る準備と心構えをして生きているのです。

und was das Werk der Hände tut,
ist gleichsam, ob ich sicher wüßte,
daß ich noch heute sterben müßte;
denn: Ende gut macht alles gut!

そして私の手のする仕事は
まるで私が今日死なねばならないと
知っているかのようです。なぜなら、
終わりよければすべてよし、と言われている通りなのですから。

3. Arie [Alto]

Willkommen! will ich sagen,
wenn der Tod ans Bette tritt.
Fröhlich will ich folgen, wenn er ruft,
in die Gruft.
Alle meine Plagen
nehm ich mit.
Willkommen! will ich…

3. アリア[アルト]

ようこそ！と私は言おう、
もし死が寝床にやって来ても。
喜んで従おう、たとえ彼が
地下の墓の中へと呼んだとしても。
すべての自分の労苦も
一緒に運んで行こう。
ようこそ！と私は...

4. Rezitativ [Sopran]

Ach, wer doch schon im Himmel wär!
Ich habe Lust, zu scheiden
und mit dem Lamm,
das aller Frommen Bräutigam,
mich in der Seligkeit zu weiden.
Flügel her!
Ach, wer doch schon im Himmel wär!

4. レチタティーヴォ[ソプラノ]

ああ、すでに天にいる身であったなら！
私もこの世を去って行きたいと願う。
そしてあの子羊、
すべての敬虔な者の花婿とともに
至福のうちに楽しみたい。
翼をこちらへ！
ああ、すでに天にいる身であったなら！

5. Arie [Baß]

Gute Nacht, du Weltgetümmel!
Jetzt mach ich mit dir Beschluß,
ich steh schon mit einem Fuß
bei dem lieben Gott im Himmel
Gute Nacht...

5. アリア[バス]

おやすみなさい、お前、現世の騒ぎよ！
いま私はお前との関わりを終わりにする。
私はすでに愛しい神様とともに
片方の足を天に置いて立っているのだ。
おやすみなさい...

6. Choral [Chor]

Welt, ade! ich bin dein müde,
ich will nach dem Himmel zu,
da wird sein der rechte Friede
und die ewge, stolze Ruh.
Welt, bei dir ist Krieg und Streit,
nichts denn lauter Eitelkeit,
in dem Himmel allezeit
Friede, Freud und Seligkeit

6. コラール[合唱]

現世よ、さらば！ 私はお前に疲れた。
私は天へと向かいたい。
そこには真の平安があり
永遠の、誇らしい休息がある。
現世よ、お前のところにあるのは戦いと争いで
露骨な虚栄以外の何ものでもないが、
天ではいつも
平安と喜びと至福があるのだ。

J.S.バッハ：カンタータ第140番《目覚めよと呼ぶ声が聞こえ》
J.S. Bach: Kantate: „Wachet auf, ruft uns die Stimme“ BWV 140

※Choraltexte in gotischer Schriftart

1. Chor [Choral Fantasie]
Wachet auf, ruft uns die Stimme
der Wächter sehr hoch auf der Zinne,
wach auf, du Stadt Jerusalem!

Mitternacht heißt diese Stunde;
sie rufen uns mit hellem Munde:
wo seid ihr klugen Jungfrauen?

Wohl auf, der Bräutgam kömmt;
steht auf, die Lampen nehmt!
Alleluja!

Macht euch bereit
zu der Hochzeit,
ihr müsset ihm entgegen gehn!

2. Rezitativ [Tenor]
Er kommt, er kommt,
der Bräutgam kommt!
Ihr Töchter Zions, kommt heraus,
sein Ausgang eilet aus der Höhe
in euer Mutter Haus.

Der Bräut'gam kommt, der einem Rehe
und jungen Hirsche gleich
auf denen Hügeln springt
und euch das Mahl der Hochzeit bringt.

Wacht auf, ermuntert euch!
den Bräutgam zu empfangen!
Dort, sehet, kommt er hergegangen.

3. Arie (Duett) [Sopran, Baß]
Sop: Wenn kömmst du, mein Heil?
Baß: Ich komme, dein Teil.
Sop: Ich warte mit brennendem Öle.

Baß: Ich öffne den Saal
Sop: Eröffne den Saal
Beide: zum himmlischen Mahl;
Sop: Komm, Jesu!
Baß: Komm, liebliche Seele!

4. Choral [Tenor]
Zion hört die Wächter singen,
das Herz tut ihr vor Freuden springen,
sie wachet und steht eilend auf.

※ゴシック体フォントはコラール（讃美歌）の歌詞です。

1. 合唱[コラール・ファンタジー]
城壁のとても高い所から夜警たちの声が
「目覚めよ」と私たちに呼びかける。
「エルサレムの街よ、起きよ」と。

今は真夜中で、
夜警は明るい声で私たちに呼びかける、
「賢い乙女たちはどこにいる？

さあ、花婿がやってきた。
起き上がってランプを手に取るがよい！
ハレルヤ！ [*「神を讃えよ」の意, ヘブライ語]

婚礼の支度を整えて、
彼を出迎えに行きなさい！」と。

2. レチタティーヴォ[テノール]
彼はやって来る。
あの花婿が来る！
シオンの娘たちよ、出て来なさい。
彼はいと高きところから急いでやってきて
君たちの母親の家に入って行く。

花婿は、ノロジカや
若い鹿と同じようにやってきて
あの連なる丘の上で跳ね
君たちに婚礼の祝宴をもたらす。

起きなさい、元気に！
花婿を迎えるために！
あそこに、見なさい、彼がやって来る。

[*次の二重唱はシオンの娘（信者）とイエスの対話と捉えられている]

3. アリア(二重唱)* [ソプラノとバス]
ソプラノ：私の救い主よ、いつ来てくれるのですか？
バス：　私は来る、お前の連れ合いとして。
ソプラノ：私は油に火を灯して待っています。

バス：　私は広間を開けよう。
ソプラノ：広間を開けて下さい。
二人：　天の祝宴のために。
ソプラノ：イエス様、来て下さい！
バス：　かわいい魂よ、来るがいい！

4. コラール[テノール]
シオン[*エルサレム]は夜警たちが歌うのを聞き、
彼女の心は喜びに躍（おど）る。
彼女は目覚め、急いで起き上がる。

Ihr Freund kommt vom Himmel prächtig,
von Gnaden stark, von Wahrheit mächtig,
Ihr Licht wird hell, ihr Stern geht auf.

Nun komm, du werte Kron,
Herr Jesu, Gottes Sohn!
Hosianna!

Wir folgen all
zum Freudensaal
und halten mit das Abendmahl.

恋人は天から晴れやかな姿でやってくる、
恩寵（おんちょう）ゆえに強く、真実ゆえに力に満ちて。
シオンの灯火は明るく、その星は昇って行く。

さあ、気高い王冠よ、来てください。
主、イエスよ、神の子よ。
ホサナ！[*「いま、お救いください」の意]

私たちは皆、喜びの広間へと付き従い、
ともに晩餐にあずかるのです。

5. Rezitativ [Baß]

So geh herein zu mir,
du mir erwählte Braut!
Ich habe mich mit dir
von Ewigkeit vertraut.

Dich will ich auf mein Herz,
auf meinem Arm gleich wie ein Siegel setzen
und dein betrübtes Aug ergötzen.

Vergiß, o Seele, nun
die Angst, den Schmerz,
den du erdulden müssen;
auf meiner Linken sollst du ruhn,
und meine Rechte soll dich küssen.

5. レチタティーヴォ[バス]

それでは、中へ入って私のところへ来なさい、
私のために選ばれた花嫁よ！
私はお前と
永遠の夫婦となったのだ。

私はお前を私の心の上に、
私の腕の上に、印璽（いんじ）のように置こう。
そしてお前の悲しんでいた目を楽しませよう。

おお魂よ、いまや忘れるがいい、
お前が耐えねばならなかった
心配も、痛みも。
お前は私の左側で休むがいい。
そして私の右側の者[*イエスのこと]がお前に口づけするだろう。

[*次の二重唱はシオンの娘（信者）とイエスの対話と捉えられている]

6. Arie (Duett) [Sopran, Baß]

Sop: Mein Freund ist mein,
Baß: Und ich bin sein(dein)*,
[*deinの譜もある]
Beide: Die Liebe soll nichts scheiden.
Sop: Ich will mit dir in Himmels Rosen weiden,
Baß: du sollst mit mir in Himmels Rosen weiden,
Beide: Da Freude die Fülle, da Wonne wird sein.

6. アリア(二重唱) * [ソプラノとバス]

ソプラノ：私の恋人は私のもの。
バス： そして私は彼*のもの。
[*神のこと。deinの場合は「あなた」]

二人： 何ものもこの愛を裂くことはできない。
ソプラノ：私はあなたとともに天国のバラを味わいます。
バス： 君は私とともに天国のバラを味わうだろう。
二人： そこで喜びは満ち溢れ歓喜となるだろう。

7. Choral [Chor]

Gloria sei dir gesungen
mit Menschen- und englischen Zungen,
mit Harfen und mit Zimbeln schon.

Von zwölf Perlen sind die Pforten,
an deiner Stadt sind wir Konsorten
der Engel hoch um deinen Thron.

Kein Aug hat je gespürt,
kein Ohr hat je gehört
solche Freude.

Des sind wir froh,
Io, io!
ewig in dulci jubilo.

7. コラール[合唱]

あなたに向けてグローリア[*賛美の歌]を歌いましょう、
人々と天使たちの舌をもって、
ハープとシンバルも鳴らして。

あなたの町の城門は12の真珠でできていて、
そこで私たちは、あなたの王座の回りで
天使たちの連れとして高みに集（つど）っています。

誰の目もかつて見たことはありません、
誰の耳もかつて聞いたことはありません、
このような歓喜を！

そのことを私たちは喜びます、
イーオ！イーオ！[*喜びの歓声]
永遠に甘い歓喜のうちに！

【許可のないコピー・転載は法律で禁じられています】

H. Winschermann

(1920 - 2021)